運動選手の自我同一性の探究とスポーツ経験(I)

—Eriksonの相互性からみたスポーツ経験の特徴—

中 込 四 郎 (筑波大学体育科学系)

鈴木 壮 (岐阜大学教育学部)

(昭和59年9月17日 受付)

On the search for ego identity of the athlete and the sport experience (I) —The feature of the sport experience viewed from Erikson's mutuality concept—

Shiro Nakagomi¹

Masashi Suzuki²

Abstract

This study reports on the feature of sport experience in relation to the process of athletes' ego identity formation viewed from Erikson's mutuality concept.

The phases of mutuality was operationally defined as crisis, exploration and commitment. One hundred and sixty-four male college athletes in the physical education department who have been involved in competitive sports since pre-adolescence volunteered as subjects. Two questionnaires were given to these subjects. One of them was a scale of ego identity formation process that was intended to measure the level of three states in the process of the ego identity formation; crisis, exploration and commitment. Then, the level of three states were evaluated by the degree of subjects' interaction with thirteen areas in their life space (Lebenswelt); six sporting, six daily life and one area in common. The construction of this scale was based on the idea of Marcia's identity status approach and the operational definition of "mutuality". The other questionnaire was Endou's ego identity scale, used to estimate the degree of identity achievement.

The principal findings were as follows:

- 1) The athletes have strong ego-involvement in sporting areas, and the area of athletic performance consistently receives especially high scores in all three states.
- 2) The level of exploration and commitment were significantly lower than that of crisis in the areas of "team-mates", "continuation in athletics", "coaches", and "sex". And the level of exploration was significantly lower than that of crisis and commitment in the areas of "choice of a job"

¹ Institute of Health and Sports Sciences, University of Tsukuba, Niihari, Ibaraki (305)

² Faculty of Education, Gifu University, Yanagido, Gifu (501-11)

and “life style and values”.

3) The level of exploration and commitment appear to be the basis of the sense of ego identity. As for coping with the developmental task, the athlete is involved with almost the same areas as the adolescent in general, i.e., occupation, values, politics, and interpersonal relationship, which contributes to ego identity formation.

4) The areas of athletic performance, significance of their continuation in athletics, and relationship to coaches were found to be important areas for the athletes. However, in these areas development of “mutuality” (Erikson) which contributes to ego identity formation seems to be difficult.

(Shiro Nakagomi and Masashi Suzuki, “On the search for ego identity of the athlete and the sport experience (I) —The feature of the sport experience viewed from Erikson’s mutuality concept—”, *Jap. J. Phys. Educ.*, 30—3 : 249—60, December, 1985)

問題と目的

スポーツ経験の質的検討を加えながら、運動選手の人格形成におけるスポーツの役割について、実証的な研究を進めたものはないようである。このことは、単に縦断的アプローチによるパーソナリティ研究の不足に原因を求めるだけではなさそうである。これまでの研究では、個性記述や個人差の理解・予測にとって有効とみられる理論や測定用具のみに依存しており、これもまた原因の一つと考えられる。運動選手が日頃のスポーツ経験を、いかにして人格変容へと結びつけるかを明らかにするためには、発達論や治療論をも踏まえた人格理論を援用してくる必要がある。

こうしたことを考えると、Erikson, E.H. (1959, 1963)^{6),7)}の後成的・漸成的 (epigenetic) 発達図式は、人間生涯²⁰⁾を展望した人格発達理論であり、われわれの人格形成過程の基礎的理解を深めるのに有効となってくる。その中でEriksonは、人格発達を規定する要因として、相互性 (mutuality)⁸⁾の概念を導入しており、そのことから運動選手の人格形成に及ぼす要因を、スポーツ場面を中心として繰り広げられる広義の対象関係にも求めることができる。さらに、競技的にスポーツへのかかわりをみせる者たち (運動選手) の発達年代を考えると、青年期との対応の大きいことがわかる。Eriksonは、特にこの青年期心性を、自我同一性 (ego identity)⁹⁾にまつわる、模索→獲得→達成のプロセスから理解している。

上述のようなことから、ここではEriksonの人格発達論に基づき、青年期にある運動選手の人格形成を自我同一性形成に限定し、研究を進めていくことになる。

Eriksonの「自我同一性」なる構成概念は、多義的であり、また非常に含蓄の深い言葉であることがわかる。したがって、この同一性概念を操作的に定義づけを行い、尺度化を試みることにはいくつかの限界と問題点が生じ、心理臨床家的立場からの批判¹⁰⁾を受けねばならないところもある。この自我同一性に関する尺度化を行った研究に対する概観は、Bourne, E. (1978a,b)^{2),3)}やMarcia, J. E. (1980)¹⁴⁾が参考になる。限界や問題点を踏まえながらも、同一性が成立する過程および機構に注目した、Marcia, J.E.^{13),14)}による同一性地位 (identity status)¹⁵⁾アプローチは、今のところ有効な手法の一つとして評価できるようである。

本研究では、Marciaの自我同一性形成に関する概念化への手法を出発点としている。自我同一性形成に向けて、重要な契機になるとされる諸領域の中で、運動選手が展開する相互性を、操作的に crisis (危機), exploration (探究・努力)¹⁶⁾, commitment (自己投入) の3側面から検討することになる。この相互性の概念から、運動選手の同一性形成におけるスポーツ経験の特徴を明らかにすることを目的としている。

方 法

1. 調査の対象者および実施期間

体育を主専攻とし、また競技的運動部に所属している、男子大学運動選手164名（年齢18歳から24歳）を対象として調査を実施した。これらの運動選手は、笠原¹¹⁾の発達段階区分に従うと、その多くが青年期後期に属することになる。また大半がプレ青年期より現在まで、競技的スポーツを継続してきている。そして、言うまでもなく調査対象者の年代の心理的特性は、「自分とは何か」「自分に期待されているのは何か」「自分は世界のうちでいかなる場所を占めるのか」¹¹⁾を問う年代であり、Eriksonの言う自我同一性形成を心理・社会的発達課題としている。

調査の実施期間は、1984年4月より5月である。調査実施にあたっては、被調査者の回答への誤解や偏向をできるだけ少なくするために、若干のラポール形成を意図した導入段階を設けた。また、本調査の無記名性を強調することによって、テストに対する防衛や、回答に対する社会的望ましさ、等の要因の緩和を図った。

2. 自我同一性尺度

対象者の自我同一性の程度を確かめるために、遠藤（1981）⁴⁾によって作成された自我同一性尺度を用いた^{※5)}。

このような尺度は、自我同一性を「統合」と「拡散」とを両極とする一次元的なとらえ方をするのである。これまでに研究者個々の操作的定義づけに基づき、自我同一性に関するいくつかの尺度化がなされてきている。本研究では、遠藤の同一性尺度がEriksonの著作の中で記述されている、同一性対同一性拡散に関する行動特徴を比較的忠実に反映していると判断し採用した。

3. 同一性形成過程尺度の作成

自我同一性の達成という課題への対処の仕方として“crisis”、“exploration”、“commitment”の3側面をとりあげた。そして、自我同一性形成への契機となると言われてきたこれまでの領域の他に、運動選手の生活空間を反映し相互性を発揮する可能性のある領域を設定することにより、同一性形成過程の検討を加えることになる。

このような立場は、注3で述べている同一性地位判定を目的としたMarciaに多くを依存してい

る。Marciaが用いた手法は、半構造化された面接法であったが、その後、面接内容のSCTや質問紙化への試みがいくつかなされてきた^{1),8),12)}。本来この尺度は、同一性地位の判定を主たる目的としてはいるが、判定への手続、ならびに各同一性地位に付された意味づけから、各個人の自我同一性形成過程における経験様式を知る手がかりを得ることもできるようである。しかし、このような目的を果たすためには、以下のような工夫が必要とされるようである。

そこでまず、Marcia以後同一性の重要な構成要素として取り上げられてきている領域の他に、運動選手特有の領域を付加した。またこれまでの研究では、crisisとcommitmentの有無の2側面に関する情報を手がかりとしていたが、ここではexplorationの側面を加えた。注4でも述べているように、Marciaのcrisisでは、本研究におけるcrisisとexplorationの両側面を面接内容に含めているようではあるが、評定の段階では区別されることなく処理されている。また、特に質問紙化した場合、これまでのcrisisに関する問いかけでは、二義的になってしまい、回答にあいまいさを含んでしまうように思われる。

設定された領域は、

- a. 大学選択（進路決定）
- b. チームメイトとの関係
- c. 将来の職業
- d. 自分の競技成績（スランプ）
- e. 専門とするスポーツ種目の継続の意義
- f. 指導者（コーチ、監督）との関係
- g. 勉強とスポーツの両立
- h. 望ましい生き方や価値の追求
- i. 異性の友人との関係
- j. 政治に対する自分の態度
- k. 宗教に対する自分の態度
- l. 性に関するもの
- m. 両親（家族）との関係

以上の13領域である。これらの項目は、一応a—g項目をスポーツ経験に関連の深い領域、g—m項目を日常生活経験に関連の深い領域、gは共有項目としてどちらにも含まれるものとした。

これらの項目（領域）に対して、3つの側面から次のような問いかけによって回答を求めた。

crisisは「どの程度迷ったり考えたり、そして悩んだりしましたか」、explorationは「迷ったり悩んだりした時に、それを克服（解決）するためにどの程度努力しましたか」、そしてcommitmentは「今のあなたにとって、重要なものとしてどの程度努力すべき対象となっていますか」といった内容の教示文が付された。回答方法は、0点から2点までの3件法を用い、crisis, exploration, commitmentに関する各個人の水準を求めた。例えば、crisisに関しては、特に迷ったり考えたり、あるいは悩んだりしたことがないという水準を0点、少しそのような経験があるという水準を1点、かなりそのような経験があるという水準を2点とした。

この質問紙によって得られる資料は、各領域ごとの3側面間の水準値の相互比較を意図して処理されることになる。Marcia法に対して上述してきたような修正を施すことにより、Eriksonの主張する人格発達を規定する決定的対人関係の範囲、領域における相互性の概念を操作的にとらえた。

結果と考察

1. 同一性, crisis, exploration, commitmentに関する得点の全般的傾向

各学年ごと、ならびに対象者全員の平均得点を示したものが表1である。なおcrisis, exploration, commitmentに関する得点は、各対象者の13領域における得点合計より求められた。

ここで得られた同一性得点($n=164$, $\bar{X}=63.27$,

$SD=7.83$)を、この同一性尺度の標準化をしていく過程で遠藤⁴⁾が得た値(男子 $n=205$, $\bar{X}=61.6$, $SD=8.4$, 女子 $n=240$, $\bar{X}=60.75$, $SD=8.15$)と比較してみると、ほぼ近似した結果であることがわかる。学年間の比較をした場合、有意な差とは言えないが、3年生における同一性得点の落ち込みが認められる。こうした傾向は、学生生活に対する満足度の調査¹⁰⁾においても認められたことであった。質問紙を通して得られる自我同一性の統合-拡散の程度は、各個人の同一性の感覚だけでなく、一般的な適応感(意識)を反映することもある。したがって、このことに対する意味づけは、4年間の学生生活における質的变化と対応させながら検討することも必要になってくる。また運動選手の場合、それぞれが行っている競技的スポーツの中での生産性(industry)の感覚を同一性の中に反映することも考えられる。しかしながらこうしたことは、本調査の結果だけから断定することはできない。

次に、同一性達成に向けての対処の仕方として設けられた3側面については、crisis, exploration, commitmentの順に、その水準が低くなっていくことがわかる。そして各側面の学年間の比較では、1要因の分散分析の結果、いずれも有意な差は認められない(crisis: $F=0.01$, exploration: $F=0.31$, commitment: $F=0.42$, $df=3/160$, $p>.05$)。Waterman, A.S. (1974)²¹⁾が指摘するように、中・高校時に経験する危機、自己投入と、大学入学以後に経験する危機、自己投入を通して形成される同一性達成とは質的に異なることが予想される。例えば、本対象者における1年生と4年生の危機の水準は、ほぼ等しい値を示しているが、自我同一性形成の過程において、同等に扱うことはやや問題が残るかもしれない。しかしながら、4つの変数における得点の学年間に有意差が認められなかったことから、以下では全被調査者を対象として分析を進めることにした。

2. crisis, exploration, commitmentの水準に関する諸領域ごとの特徴

図1は各領域ごとの3側面の水準、及びその差に関する有意性を1要因の分散分析によって検討

表1. 各測定項目の $\bar{X}$, SD

	同一性	crisis	exploration	commitment
1年($n=42$)	63.0(6.17)	11.3(3.05)	9.2(4.10)	8.7(3.99)
2年($n=42$)	64.0(7.45)	11.4(3.39)	9.5(3.90)	9.4(4.29)
3年($n=43$)	61.3(8.98)	11.3(3.48)	8.7(4.01)	8.8(5.00)
4年($n=37$)	65.1(8.25)	11.2(4.15)	9.5(4.32)	8.3(4.42)
F値($df=3/160$)	1.77	0.01	0.31	0.42
全体($n=164$)	63.3(7.83)	11.3(3.49)	9.2(4.05)	8.8(4.42)

図1 諸領域ごとにみた crisis, exploration commitment の水準

したものである。得られた結果の中から、特徴的と思われるいくつかの領域について検討を加えてみることにする。

3側面ともに最も高い水準を示しているのは、「競技成績」の領域であり、最も低い水準は「宗教的態度」の領域である。前者のような結果は、本調査対象が運動選手であることより、了解することができる。さらに、「勉強とスポーツ」を共有領域として、各個人の水準得点の合計を基に、スポーツ関連領域(a-g)と日常生活関連領域(g-m)の比較を行ったのが表2である。3側面ともに、スポーツ関連領域の水準の高いことが認められる(crisis: $t=9.792$, exploration: $t=8.977$, commitment: $t=7.359$, $df=326$, $p<.01$)。

また、「宗教的態度」に関して一様に低い水準を示していることは、無藤¹⁶⁾、加藤¹²⁾らによるわが国の大学生を対象とした結果とも一致している。運

表2. スポーツ関連領域と日常生活関連領域の比較

		crisis	exploration	commitment
スポーツ関連領域	$\bar{X}$	7.3	6.3	6.0
	SD	2.07	2.62	2.79
日常生活関連領域	$\bar{X}$	5.0	3.9	3.7
	SD	2.17	2.34	2.73
tの値(df=326)		9.792**	8.977**	7.359**

**は $p<.01$ を示す

動選手の自我同一性の形成にあたっても、宗教という領域はさほど重要でないと考えられる。

3側面間の水準の比較により、設定された領域ごとの相互性の状態を知ることができる。「大学選択」に対する commitment の水準は、一応現在大学に存学していることを考えた場合、その水準はかなり低い値になることが予想される。しかし、ここでの結果($\bar{X}=0.57$, $SD=0.70$)は、自分が過去に行ってきた大学選択への迷いをそのまま継

続している者が対象者の中にいることを示していると考えられる。

crisis の水準に比べて, exploration, commitment の両者がともに低い領域として, 「チームメイト」「スポーツの継続」「指導者」「性」があげられる。領域によって具体的な意味内容は異なってくるが, これらの領域に対するかかわり方は, 不満・悩みはあっても完全には解決できないといった“あきらめ”, あるいは若干の危機を経験しながらも, その時々状態に順応してきたことを意味するのではないかと考えられる。次に, crisis, commitment の水準に比較して, exploration の水準が低い領域として, 「将来の職業」と「生き方や価値」をあげることができる。これらの2つの領域は, 自我同一性の達成において重要な契機となる領域として位置づけられている。特に, 「職業」については Marcia 以後自我同一性地位面接に, いくつかの領域が付加され修正が施されてきたが^{9), 17), 22)}, かならず中核をなす領域であった。したがって, この2領域(課題)へのかかわり方(対処の仕方)は, 運動選手の平均的な同一性形成過程を特徴づけてくれることになる。将来の職業は, 自分にとって重要な, そして関心の深い領域であり, また現在までの間に何等かの形で選択を迫られてきているようである。しかしその選択決定は, 多くの可能性を確かめてみる(模索)といった具体的行動に表われるほどのものではなかったようである。本調査対象となった運動選手たちの多くは, 入学時より教職志望の割合が高く, そして在学中に志望の変更をすることが少ないようである。つまり, この領域における exploration の水準の低さは, 運動選手自身の中に将来教員になることへの確信が強いことから生まれたと考えられる。そして, 「生き方や価値」の領域における同様な傾向は, 職業に対する明確な目標と, それに対して, これまでに経験してきたスポーツとが有機的に関連するものと意識されることから, その領域での迷い・悩みの克服(解決)に向けてあえて深く探究や努力をする必要がなかったのであろう。

「将来の職業」「生き方や価値」の領域において,

crisis の水準に対応するほどの exploration の水準が認められないことは, 自我同一性形成過程で経験すべきことを, いわば“積み残し”の状態とも考えられる。もし, 自我同一性形成への理想的なプロセスが, crisis → exploration → commitment であると考えれば, ここでの積み残された exploration はいずれ経験されねばならない課題となる。このような考えに立つと, 本対象者たちの commitment の側面に exploration といった課題が付与されている可能性も考えられる。

3. 自我同一性の程度と諸領域ごとの crisis, exploration, commitment の水準

ここではこれまでに行ってきた自我同一性の形成過程に関する情報と, 同一性達成の程度(統合-拡散)との対応を試みることににより, さらに運動選手の自我同一性形成におけるスポーツ経験の特徴を探ることになる。便宜的に, 遠藤の自我同一性尺度の得点に基づき, 高一低同一性得点者を抽出した。両者は得点分布の上・下位者のそれぞれ約25%に相当し, 69点以上の42名を高同一性群, そして58点以下の41名を低同一性群とした。図2~4は各領域ごとの crisis, exploration, commitment の水準について, 両群の比較を行ったものである。

crisis の水準に関しては, 全般的に両群では近似した様相を示しているようである。領域ごとに水準の比較をしていくと, 「政治的態度」のみに有意差が生じた($t=2.45$, $df=81$, $p<.05$)。また, 13領域の crisis 水準の合計を比較しても, 両群間の近似傾向が認められる(高同一性群 $\bar{X}=12.26$, 低同一性群 $\bar{X}=11.76$, $t=0.62$)。次に, exploration の水準についてみると, 「スポーツの継続」の領域のみにわずかの逆転が生じているが, 他の領域は全て高同一性群の方が高く, 迷いや悩みを克服(解決)しようとする探究や努力を多くしていることがわかる。水準点の合計では, 高同一性群が $\bar{X}=11.29$, 低同一性群が $\bar{X}=8.68$ となり, 両群間の差異が明らかとなる($t=2.80$, $p<.01$)。そして, 各領域ごとに比較した場合, 5領域に有意差ないしは有意な傾向を認めることができる。

図2 両群の諸領域における crisis の水準の比較

図3 両群の諸領域における exploration の水準の比較

図4 両群の諸領域における commitment の水準の比較

commitment の水準については, exploration の側面ほどには両群間の差はみられないが, 全般的に高同一性群の方が高く, 設定された諸領域への関心が高いことがわかる。両群間で有意差の認められた領域は, 「生き方や価値」($t=2.46, p<.05$) 「政治的態度」($t=3.00, p<.01$), そして水準の値は低いが, 「宗教的態度」($t=2.43, p<.05$) である。

以上のような結果から, 自我同一性形成における形成過程での exploration の水準ならびに, 現時点での commitment の水準が, 同一性の感覚を支えていることがわかる。単にそれまでの生活経験における危機の有無ではなく, その危機に対する解決に向けての探究や努力の経験をへて, 確固たる信念のもとに自己の関心を投入できる対象(領域)を発見するまでに至る過程が, 自我同一性の程度と関係しているようである。

一般に, 青年期とかかわりの深い職業, 価値感, 政治, 対人関係等の領域が, 同一性達成への重要

な契機になると言われてきた。高一低同一性群の間に有意な差, ないしはその傾向のみられた領域の多くは, 上述の主張と対応していることがわかる。このようなことから, 運動選手たちの自我同一性形成においても, 他の青年期にある者たちと同様な領域での心理・社会的発達課題への対処の仕方が関係していることがわかる。

ところで, スポーツの場に直接関連する領域において, 3側面ともに両群間で有意差が認められなかったことに気が付く。しかしこのような結果から, それらの領域が運動選手の同一性形成に寄与していないと言い切るわけにはいかないようである。「競技成績」「スポーツの継続」「指導者」の領域での crisis の水準は, 日常生活場面での価値感や政治等と比べて, 同等もしくはそれを上回る値を示していることがわかる。それらの水準の程度から予測して, これらの領域が運動選手に対して, 多くの経験を与えてきていると考えられる。そのような領域が同一性の感覚の差異に反映しな

表3. 危機様態の分析

領 域		総件数	有効件数	探究・努力の 広がりや深まり		
				有	無	不明
上位群 (n=42)	競技成績	28	27	6(22)	13(48)	8(30)
	スポーツの継続	7	6	3(50)	1(17)	2(33)
	指導者	11	10	4(40)	6(60)	0
下位群 (n=41)	競技成績	19	16	3(19)	11(69)	2(12)
	スポーツの継続	11	11	3(27)	6(54)	2(19)
	指導者	8	7	1(14)	4(57)	2(29)

() : 有効件数に対する割合

かった理由として、crisis から exploration の過程（ここではそのような過程を「危機様態」と呼ぶことにする。）の特徴に求めることができるようである。本調査の中では危機様態について、その時期、出来事の具体的内容、克服（解決）の有無およびどのように対処したか、等に関する自由記述を求めていた（crisis の問いかけで2点とした領域のみについて）。それらの報告に対して、探究・努力の広がりや深まりの有無といった観点から分析^{※6)}を試みたのが表3である。分析の対象となる報告の数が少ないことや、分析不可能（不明）な資料も含まれていることから、統計的な有意性の検討は加えなかった。しかし、上位群においても、危機解決にむけての探究・努力の広がりや深まりが認められない件数の多いことがわかる。つまり、スポーツ関連領域での経験の内容が、両群の運動選手たちにとっては非常に身近なものであり、経験を対象化することができず、また克服（解決）に向けていくつかの可能性を模索する機会も少ないといった特徴をあげることができる。

3 側面ともに水準の高い「競技成績」の領域における危機様態の主題は、スランプ脱出のための努力の過程と言える。そこでの記述をいくつか拾ってみると、「練習をたくさんやった」「何も考えずに頑張った」「やるしかないの開き直りの精神でやった」「時期が過ぎて競技結果がでてしまえば、悩みとはならなかった」等の内容と類似するものが両群でかなりみられた。運動選手にとって、この領域での危機は他のどの領域よりも、その後に関わり探究や努力を強く導き出しているようである。

る。しかしながら、上述の記述を見る限り、Erikson⁸⁾の言う自我同一性の形成における、時空間（自己と他者、そしてそれ以前の自己との交わり）の中での反省と観察の同時的過程を伺うことはできない。運動選手にとって、この領域での問題は非常に現実的に受けとめられ、解決への猶予期間が与えられることはないようである。そして迷いや悩みに対する答えは（解決への筋道）、固定的なものとして意識されているようである。このようなことから、「競技成績」の領域において、両群間に有意な差が生じるまでには至らなかったと考えられる。また、運動選手にとって、「スポーツの継続」や「指導者」の領域は、日常生活面での価値観や対人関係に代わりうる同一性達成への重要な契機へと発展する可能性をもっていると考えられる。しかし両群を弁別しうるほどの領域とはならなかった。やはりこの領域も同様に、多くの可能性を模索することが少ないといった許容度の低さから生じた結果であることが考えられる。このことは、自我同一性形成に働きかけるようなEriksonの言う“相互性”が展開しにくい領域であるとも言い換えることができる。

以上のように本研究では、相互性の程度から、スポーツ経験の一般的特徴を探ってきた。相互性は同一性形成における必要条件ではあるが、十分条件とは考えられないようである。経験の場が相互性の展開に対して、促進的環境ではなくても、同一性課題を達成していくこともある。つまり、同一性形成に果すこの相互性は、個人差要因によってその展開が異なってくることが考えられる。今後は、スポーツ経験の場で繰り広げられる相互性に働きかけている諸要因の同定をすることが必要となる。また、相互性概念の再検討をし、面接法による資料収集の方法を工夫することも大切となる。このようなことにより、運動選手の人格形成におよぼすスポーツ経験の影響について理解するうえで、推論の幅がせばまるものと期待される。

ま と め

Erikson の相互性の概念を操作的に、crisis,

exploration, commitment の3側面に置き換えた。この相互性の程度から、運動選手の人格形成に果たす(本研究では自我同一性形成に注目した)スポーツ経験の特徴を探ってきた。

運動選手の場合、スポーツ関連領域への自我関与が強く、その中でも特に「競技成績」に対する3側面からの水準が高いことが認められた。そして、crisis の水準に比べて、exploration, commitment の両者がともに低い領域として、「チームメイト」「スポーツの継続」「指導者」「性」が注目された。また、「職業」や「生き方や価値」の領域に対しては、crisis, commitment の水準に比べて exploration の水準の低いことが認められた。

自我同一性形成の過程での exploration ならびに commitment の水準が同一性の感覚を支えているようである。また、自我同一性達成の契機となる領域に関して、運動選手も他の青年期にある者たちと同様な傾向が認められた。運動選手にとって、「競技成績」「スポーツの継続」「指導者」は、かかわりの深い領域ではあるが、同一性の感覚に寄与しうるほどの経験がなされているとは思われない。これらの領域は、自我同一性形成に働きかけるような、Erikson の言う“相互性”が展開しにくいようである。

注

注1) 相互性の概念は、Erikson の自我発達論の基本的特徴の一つである。青年期の発達課題である「自我同一性」の形成過程を理解するうえで、この相互性は鍵概念となっているようである。

彼は8つの心理・社会的発達段階に対応して、最も影響力があり、そして最も深い心理的なかわりをもってくる対人関係の範囲(radius of significant relations)を明記している。それに従うと自我同一性の達成にとって仲間グ

ループ、グループ対グループ、リーダーシップのモデル等の範囲、ないしは領域で繰り広げられる経験が緊密な関係をもってくる。そして、そこで繰り広げられる経験は、発達の主体者が一方的に働きかけるといった関係でなく、「働きかけるとともに働きかけられる」というものである。このように相互性とは、人格発達に資する対象関係として、発達主体者と取り巻く環境とが全く互角の立場にある交わりの世界を考えている。したがって、各個人の発達段階に応じた対人関係の範囲、領域における相互性のあり方を吟味することによって、人格発達の状態を理解・予測する情報を得ることができる。

注2) 「…、自我が特定の社会的現実の枠組みの中で定義されている自我(a defined ego)へと発達しつつあるという確信である。そして、私はこの感覚(sense)を自我同一性とよびたいと思う。」と、Erikson は述べている⁹⁾。つまり、青年期にある者たちが、自らを社会的存在として、新たに社会との関連をはかりながら、安定した独自の自己像を作り上げたものと考えられる。一般的には、そうした自我同一性形成の課題として「自分は何者であるか、何者であり得るのか」といった問いに対して、解決を見い出していくことであると言われている。このことは、いわゆる「自分ができる」¹⁰⁾と称するような過程に相当するとも考えられる。

こうした自我同一性形成の背景には、自我の統合・総合的機能が働いている。各個人の同一性の程度は、この自我機能の発達水準を示すと同時に、同一性に関する発達課題を遂行していくことにより、自我機能を高めていくことにもなっている。

注3) Marcia は自我同一性の達成という課題への対処の仕方として、crisis (危機)と commitment (自己投入)の有無といった2つの側面に注目した。前者は、その人にとって有意となるいくつかの可能性を選択しようとして、迷い考え試行した時期に関する有無を問う。後者は、自己の信念に基づいて、関心を示したり努力したりする有無を問うものである。そして、これらの経験様式が職業、宗教、政治の領域に対して、半構造化された面接によって確かめられた。この2つの側面からの情報を手がかりに、以下の

表4. 自我同一性地位

	Identity Status			
	Identity Achievement (同一性達成)	Foreclosure (早期完了)	Identity Diffusion (同一性拡散)	Moratorium (モラトリアム)
Crisis	present	absent	present or absent	in crisis
Commitment	present	present	absent	present but vague

(Marcia¹⁴⁾より)

ような基準で自我同一性地位が決定された。（各同一性地位に付された心理的意味づけ，あるいは状態像については，多くの研究で紹介されているので省略する。）

このように Marcia 法は，形成過程に注目した唯一の同一性尺度として高く評価される。しかし，それによって得られた資料を同一性の地位分類へと処理することから，形成過程そのものの理解を深めることにはならなかったようである。同一性形成過程尺度として，この Marcia 法を用いるためには，領域，スコアリングの方法，そしてその用い方（処理）等の修正が必要となる。

注4）この“exploration”という用語を用い初めたのは，恐らく Matteson, D.R. (1972)¹⁵⁾であろう。彼は Marcia によって用いられた“crisis”という言葉が，青年期危機説を必要以上に強調しているとし，そのかわりに exploration という用語の使用を提案した。したがって，内容的には Marcia の crisis とほぼ同義であり，交換可能なものと思われる。しかし本研究では，危機克服（解決）への探究・努力といった意味内容を当て，この exploration を用いることにした。Marcia の crisis の中でも，迷い悩みの有無と，それに対するここでの探究・努力（exploration）を含んでいるようであるが，自我同一性の形成過程を検討するには，危機（ここでは迷い悩みの時期）の有無と，それに対する探究や努力の有無を切り離す方が有効であると考えた。

注5）この同一性尺度は Erikson の著作の中から，同一性の安定や拡散を記述する文章を抽出し，それを基に質問項目化している。19項目より成り，5件法による自己評価法が採用されている。両端である同一性が最も安定（達成）した状態を5点とし，拡散の状態に対して1点が配点されている。

注6）探究・努力の広がりや深まりとは，危機の解決の過程で，その対象との積極的相互交渉が認められたり，危機を契機として発達主体者が内省するような局面が生じた場合をいう。各領域において crisis の水準が2点となっているが，具体的記述のない者があり，それらは無効件数として扱った。また，記述内容からは評価が困難であるものに対しては，不明として処理した。

評価にあたっては，両群から無作為に10名ずつ抽出し，2人の評価者が独立して評価を行った。抽出された20名の有効件数の合計は20であった（競技成績：10，スポーツの継続：5，指導者：5）。両評価者間の一致率は80%（16件）であった。評価の不一致に関しては，両評価者間で再検討し合意を求めた。残りの資料に対しては，評価者の合議によって行った。

引用・参考文献

- 1) Adams, G.R., Shea, J. and Fitch, S.A., "Toward the development of an objective assessment of ego-identity status," *Journal of Youth and Adolescence*, 8-2: 223-73, 1979.
- 2) Bourne, E., "The state of research on ego identity: A review and appraisal. Part I," *Journal of Youth and Adolescence*, 7-3: 223-51, 1978a.
- 3) Bourne, E., "The state of research on ego identity: A review and appraisal. Part II," *Journal of Youth and Adolescence*, 7-3: 371-93, 1978b.
- 4) 遠藤辰雄(編), *アイデンティティの心理学*, ナカニシヤ出版, 1981.
- 5) 土居健郎「「自分」と「甘え」の精神病理」*精神神経学雑誌*, 62-1: 149-62, 1960.
- 6) エリクソン（小此木啓吾 訳）, *自我同一性—アイデンティティとライフサイクル*, 誠信書房, 1973. (Erikson, E.H., *Identity and life cycle: Selected papers*, *Psychological Issues*, 1(1), 1959.)
- 7) エリクソン（仁科弥生 訳）, *幼児期と社会*, I(1977)/II (1980), みすず書房. (Erikson, E.H., *Childhood and society* (2nd ed.), Norton, 1963.)
- 8) エリクソン（岩瀬庸理 訳）, *青年と危機*, *アイデンティティ*, 金沢文庫, 1973. (Erikson, E.H., *Identity-Youth and crisis*, Norton, 1968.)
- 9) Grotevant, H.D., Thorbecke, W. and Meyer, M.L., "An extension of Marcia's identity status interview into the interpersonal domain," *Journal of Youth and Adolescence*, 11-1: 33-47, 1982.
- 10) 速水 修・中込四郎「学生生活の満足状態と精神的健康状態について」*北海道教育大学紀要（第一部C）*, 33-2: 97-104, 1983.
- 11) 笠原 嘉, 「今日の青年期精神病理像」笠原・清水・伊藤(編), *青年の精神病理*, 弘文堂, 1966. pp. 1-27.
- 12) 加藤 厚「大学生における同一性の諸相とその構造」*教育心理学研究*, 31-4: 20-30, 1983.
- 13) Marcia, J.E., "Development and validation of ego identity status," *Journal of Personality and Social Psychology*, 3-5: 551-58, 1966.
- 14) Marcia, J.E., "Identity in adolescence," in Adelson, J. (Ed.), *Handbook of adolescent psychology*, John Wiley & Sons: New York, 1980. pp. 159-87.
- 15) Matteson, D.R., "Exploration and commitment: Sex differences and methodological problem in the use of identity status categories," *Journal of Youth and Adolescence*, 6-4: 353-74, 1972.
- 16) 無藤清子「「自我同一性地位面接」の検討と大学生の自我同一性」*教育心理学研究*, 27-3: 28-36, 1979.
- 17) Orlofsky, J.L., Marcia, J.E. and Lesser, I.M., "Ego identity status and the intimacy versus isolation crisis of young adulthood," *Journal of Personality and*

Social Psychology, 27-2: 211-19, 1973.

18) Simmons, D.D., "Development of an objective measure of identity achievement status," *Journal of Projective Techniques and Personality Assessment*, 34-3: 241-44, 1970.

19) 鐘幹八郎「展望, 青年期の臨床的研究」*教育心理学年報*, 23: 103-17, 1983.

20) 鐘幹八郎, 「個人・社会・歴史」*性格の科学*, 講座現代

の心理学, 第6巻, 小学館, 1984. pp. 283-358.

21) Waterman, A.S., Geary, P.S. and Waterman, C.K., "Longitudinal study of changes in ego identity status from the freshman to the senior year at college," *Developmental Psychology*, 10-3: 387-92, 1974.

22) Waterman, C.K. and Nevid, J.S., "Sex differences in the resolution of identity crisis," *Journal of Youth and Adolescence*, 6-4: 337-42, 1977.